

現代組織におけるジェンダー・バイアス
—サークル活動の体験から考える

1 2 0 4 2 0 0 4

藤原 亜季子

指導教員 立木茂雄

〔目次〕

要約

1. 序論	- 4 -
2. テニスサークルプリンスについて	- 5 -
2.1 プリンスとは	- 5 -
2.2 サークル構成員	- 6 -
2.3 歴代の会長、副会長の性別	- 6 -
2.4 幹部とは	- 7 -
3. 調査	- 8 -
3.1 調査用具	- 8 -
3.2 調査の枠組み	- 9 -
(1) 調査対象	- 9 -
(2) 分析の展望	- 9 -
4. 結果	- 10 -
4.1 なぜ初の女性会長が誕生したのか	- 10 -
(1) 人数不足	- 10 -
(2) 男性の人柄	- 12 -
(3) ジェンダーによる役割分担意識	- 16 -
(4) 会長自身の人柄	- 20 -
4.2 なぜ女性会長は続かなかったのか	- 23 -
5. まとめ	- 30 -
6. 考察	- 30 -

参考文献

〔要約〕

本稿では現代組織におけるジェンダー・バイアスを、私自身のサークル活動での体験を通して分析した。

私の所属しているテニスサークルプリンスでは、会長、副会長は代々男性が務めてきた。だが、我々の代が幹部を務める時、会長、副会長共に女性が務めることとなったのである。そしてその後、女性会長は続かなかった。これらのことには何らかの原因があるのではないかと考え、調査した。分析にはインタビュー調査を用い、調査対象は私と同回生である現4回生のメンバーとした。

女性会長誕生の要因には、人数不足、男性の人柄、ジェンダーに対する意識、会長の人柄があげられるのではないかと考え、その4つの点から分析を行った。その結果、男性の人柄、会長の人柄が関連していることが明らかとなった。男女の平等意識が高い者が多いのではないかとこの仮説は間違っていたようである。また、女性会長が続かなかった要因としては、それぞれのメンバーに性役割分担意識が根強く残っていることがあげられるだろう。そのため、女性会長は皆に受け入れられなかったのだと考える。

些細な要因であったが、その2つの要因が揃わなければ女性会長は誕生していなかったであろう。ジェンダー・バイアスの意識が我々に残っている限り、女性がトップに立つことは容易なことではないのではないだろうか。

1. 序論

卒業を間近に控え、私は4年間の大学生活を振り返える時間が多くなった。4年という長い期間、私は何をして過ごしてきたのであろうか。学生として最低限の勉強はしたが、人に胸を張って言えるほどではない。アルバイトも経験したが、これも人並みであろう。では、堂々とこれには全力を注いだといえるものは何か。それはサークル活動である。そこで私は4年間の集大成であるこの卒業論文に、サークル活動を取り上げることにした。

私の所属しているサークルは硬式テニスサークル「プリンス」である。このプリンスはテニスだけではなく、総会や飲み会など多くの活動を行っている。これらの活動を行っていく上で、メンバーそれぞれの支えはもちろん必要だが、幹部と呼ばれる者たちの存在が非常に重要となってくる。幹部は1年間サークルの運営のために働くので、サークルでのテニスの練習がない時間や休日にもよく皆で集まり、話し合いなどを行う。本当にその1年間はサークルが中心の生活になるのである。私もある役職に就いていたので、その1年間はよくサークルのことを考え、サークル中心の生活を送っていた。そのため、私が学生時代に最も頑張ったことは何かと問われると、このサークルでの幹部での活動と答えるだろう。

幹部の中でも最も重要なポジションは会長だ。サークルのトップとなるのだからこの役職に就く者はそれ相応の働きを期待されるだろう。この最も重要なポジションである会長は、今まで男性が務めてきた。男性が務めなければならないという決まりがあるわけではない。自然と男性が務めてきたのである。しかし、この「会長は男性」という流れが止まることになった。我々の代がその流れを止めたのである。我々の代が幹部を務めることになった2005年10月、我々は女性を会長として選び出した。さらに我々は副会長も女性が務めることとなり、サークルのトップ2人が女性という幹部形態を採ったのである。この事は、他の回生のメンバーから驚かれることとなった。

では何故今まで男性が当然のように務めてきた会長を、我々の代では女性が務めることになったのであろうか。1981年に設立されてからのプリンスの長い歴史で初めてという出来事なのだから、これは何か理由があつてのことだろう。これには男女の人数の変化、性役割にとらわれない者が多いなどの理由が考えられるが、実際はどのようなことが関連しているのであろうか。

また、この女性会長の次の会長はまた男性に戻ることとなった。女性会長は続かなかつたのである。このことにより、サークル史上初の女性会長は、サークルの歴史上唯一の女

性会長となっている。女性会長が続かなかったこともまた、何らか理由があつてのことではないかと考える。そこで本稿では何故初の女性会長が誕生したのか、そして何故女性会長は続かなかったのかを解明することとする。

2. テニスサークルプリンスについて

2.1 プリンスとは

まずは本題に入る前に、私が所属している硬式テニスサークルプリンスについて説明する。

同志社大学にはテニスサークルが多数存在する。その中でも同志社大学には「DTL」と呼ばれる同志社テニスリーグに加盟しているテニスサークルと、加盟していないテニスサークルに分けられる。プリンスはこのDTLには所属しておらず、他のテニスサークルとの試合などの交流はない。DTLに加盟していないと小規模なサークルのように思われがちだが、実際はそうではない。現在(2007年6月)のメンバー数は96名であり、DTLに加盟していないサークルの中では大規模なサークルだ。さらにプリンスは1981年に創設され、今日まで続いている歴史のあるサークルなのである。また、何回生からでも所属できるので、2回生になってからなど、途中から入会する者も少なくない。

テニスの練習日は月曜日から土曜日の週6日で、1日2時間の練習を行う。2時間の練習では京田辺校地から少し離れた久津川という駅にあるテニスコートで行われる。そこでは1面のコートを使い、皆で練習する。この週6日の練習の参加は強制ではない。週に何回、月に何回は最低参加しなくてはならないという決まりもなく、練習は自由参加としている。そのため毎日参加する者と、全くと言ってよいほど練習に参加しない者がおり、参加率にはかなりの差が生まれる。また、プリンスでは総会や飲み会、部内戦、1年に2回の夏合宿、そして冬合宿という名称のスノーボード旅行などの多くの行事も行われているが、これらも自由参加である。

また、プリンス最大のイベントである夏合宿では4泊6日で避暑地によって行われ、1日7時間の練習が行われる。そして、夜には肝試しや飲み会、ゲームなど毎日イベントがある。この夏合宿はテニスの技術の上達だけでなく、仲間との絆を強くすることも目的とされている。

このようにプリンスではイベントや練習などはたくさんあるが、強制ではないため個人の自由を尊重する。そのため、他のサークルとの掛け持ちも可能で、気軽に続けられるサ

ークルなのだ。

2.2 サークル構成員

プリンスには今までラケットを握ったことのない者、運動部にも所属したことのない者などのテニス初心者の入会者も多い。もちろん中学校、高校のクラブ活動などでテニスをしてきた経験者もあり、テニスの技術には差がある。

現在（2007年6月）のメンバー数は表1の通りだ。2回生と3回生の人数が多いことがわかる。そして男女の割合を見ると大体、4：5と女性のほうが多く在籍している。

表 1 2007年6月のプリンスメンバーの人数

	男性	女性	合計
1回生	14	6	20
2回生	9	19	28
3回生	11	18	29
4回生	5	9	14
院生	5	0	5
合計	44	52	96

2.3 歴代の会長、副会長の性別

我々の代はサークル史上初の女性会長、そして史上初の会長、副会長が共に女性であったということであるが、今まではどのようなようであったのだろうか。会長は男性が務めてきたと聞いたことはあるが、副会長がどのようなようだったのかは知らない。私がサークルに入りたての頃には副会長は女性が務めていたため、会長が男性、副会長は女性というイメージを持っていた。だが、それ以前はどのようなようであったのだろうか。サークルのOBの方々に尋ねた結果、1990年まではさかのぼることが出来た。その結果は表2のようである。

表 2 1990 年から 2007 年までの会長・副会長の性別

	会長	副会長
1990	男性	男性
1991	男性	男性
1992	男性	男性
1993	男性	男性
1994	男性	男性
1995	男性	男性
1996	男性	男性
1997	男性	男性
1998	男性	男性
1999	男性	男性
2000	男性	男性
2001	男性	男性
2002	男性	男性
2003	男性	女性
2004	男性	女性
2005	女性	女性
2006	男性	女性
2007	男性	男性

塗りつぶされている 2005 年が我々の代である。この表を見て頂くとわかるように、2002 年までは会長、副会長共に男性が務めていたことがわかる。そして、OB の方曰く、1990 年以前も女性が務めたことはないのではないかということだった。そうなる、2003 年の副会長が女性初登場ということになる。このことからプリンスでは女性があまり前に出ているサークルではなかったことがうかがえるだろう。

そしてその女性が控えめなこのプリンスで、この表 2 でもわかるように 2005 年にトップ 2 人が女性というかつて無かったことが起こったのである。

2.4 幹部とは

本稿の中での幹部とは、プリンス内で中心となり、サークル活動を支えていく人物たちのことを指す。この幹部は毎年交代で務められ、2 回生の 10 月から 3 回生の 10 月までの 1 年間に務めることとなる。そして、幹部はその年に幹部を務める学年のメンバーで話し合って決める。他の学年からの指名などは一切無く、自分達だけで決めるのである。そのため、他の学年の予想とは違う結果となることもよくある。

また幹部には会長、副会長だけでなくさまざまな役職がある。これを 1 つずつ仕事内容と共に紹介しよう。

まず 1 つ目は「会長」だ。これはサークルの仕事を統括し、サークルを代表する役職で

ある。統括するためには他の役職の仕事も全て把握しておかなければならない。そして総会などの集まりでは司会進行を務めるなど皆の前で話をする機会も多く、統率力が必要とされるだろう。また、メンバーに何かあった時などの責任はこの会長がとることになる。このように会長はメンバーからの信頼はもちろん他の要素も多く必要となり、忙しく責任のある役職なのだ。

2つ目は「副会長」である。この役職は幹部の中でも最も仕事が不明確である。他の役職の仕事も把握しておかなければならないし、皆の前で話す機会もある。だが、これと言った決まった仕事はなく、基本的には会長の補佐という位置付けであろう。会長、副会長は1人ずつである。

3つ目は「企画」で、この役職は普段の飲み会などの店の予約、合宿で泊まる宿の予約などが主な仕事である。また、イベントを考え、計画するのもこの企画の仕事だ。店や宿の予約というものが想像以上に大変で、条件の合う所を探し出すには下見や旅行会社の方との話し合いなども必要なため、忙しい役職だ。この企画には3～5人くらいが就任することが多い。

4つ目は「ヘッドコーチ」だ。これは普段のテニス練習のコーチが主な仕事である。練習はヘッドコーチが仕切り、進めていく。そのためテニスの腕前も、普段のサークル活動の参加も必要となる。また、合宿などの練習メニューを考えるなど、テニスサークルとしては欠かせないポジションなのである。この役職は2～5人ほどで行われる。

最後は「会計」である。これは飲み会などの前に皆からお金を集めたり、テニスコート代を集めたりする。またサークルの金庫番であり、どのくらいお金を使えるかなどは、この会計が管理をしている。この会計は大抵2人で務めることとなる。

このように幹部とは5つの役職からなっており、それぞれ異なった仕事を持っている。男性、女性がこの仕事をするという決まりはないが、今までは会長とヘッドコーチはほとんど男性が務めて来たようである。

3. 調査

3.1 調査用具

調査にはインタビュー調査を用いることとした。これは皆が何を考え、その答えを出したのかというそれぞれの細かい考えをデータとして引き出したかったからである。

また、調査対象者に事前にインタビューをさせて欲しいということを知らせておき、イ

インタビューを行った。この時内容は知らせていない。その時に急に尋ねたほうが建前ではなく、本音が引き出せるのではないかと考えたためである。そしてすぐインタビューを実施するのではなく、幹部をしていた頃の思い出話などをし、気楽に話ができる状態になってから始めることとした。また、インタビューは1対1で行ったため、それぞれのメンバーが都合の良い授業の合間、サークル後、休みの日などさまざまな時に行った。この時に要した時間は短いもので30分、長いものでは1時間強くらいであった。

3.2 調査の枠組み

(1) 調査対象

調査対象は現4回生のプリンスメンバーである。その中でもインタビューは4回生全員ではなく、女性7人、男性3人、合計で10人に実施した。このメンバーは幹部の話し合いの中心となったメンバーである。その時になんらかの理由で参加していなかったメンバーにはインタビューは行わなかった。そして、調査対象を現4回生だけに絞ったのは我々の代が幹部を決める時に、現4回生だけで決めたからである。他の回生のメンバーにも話を聞くことで、周りの状況もわかり得るかも知れない。だが、このメンバーにインタビューを行えば当時の状況や、何故会長に女性を選んだのかを引き出せると考えたため、現4回生へのインタビューで検証することにした。

また、なぜ女性会長は続かなかったのかを分析するには後輩たちにインタビューするべきかもしれないが、それは後輩たちに私達の幹部としての活動への思いを聞くことになる。1度は後輩たちにインタビューを試みたが、それは容易ではなかった。やはり先輩である私に否定的な意見などは言いづらいようで、正直な意見は引き出せなかったのである。そのため、この問いに対する答えも現4回生からのインタビューから分析することとした。

(2) 分析の展望

インタビューでは幹部としての活動への思いについて尋ねた。具体的な内容としては、何故会長に女性を選んだか、女性を選ぶことにどう感じていたか、人数に余裕があれば男性を会長に選んでいたか、実際に会長を女性が務めたことに対しどう感じたか、である。これらの質問による各々の答えを細かく分析していこう。

4. 結果

4.1 なぜ初の女性会長が誕生したのか

まず私は女性会長が誕生した要因に人数不足、男性の人柄、ジェンダーに対する意識、会長の人柄等があげられるのではないかと考えた。そこで、これらの4つのことが本当に関連しているかどうか、現4回生へのインタビューから1つずつ検証していきたい。

(1) 人数不足

まずは人数不足という要因について分析する。つまり、女性会長が誕生したのは、我々の学年の男性の人数が少なかったためではないか、という仮定だ。実際、人数不足という言葉はインタビュー中に何度か出てきたのである。ここでいう人数が少ないというのは、男性の人数が少ないということと理解してよいだろう。では、その人数不足という話が出てきた部分を検証してみる。

なぜ会長に女性を選んだのかという問いに対し、

A君「女性を選んだっていうか結局は人数不足じゃないん。ヘッドコーチは最低2人はいるし、ヘッドコーチはテニスも教えれんと出来んやろ。そんでテニス教えられるのは俺、B君、C君の3人で、C君は幹部やる気なかったし、俺とB君がヘッドするしかなかったから。DさんとEさんがヘッドするっていう話も出たけど、やっぱ出席率良くて、テニスうまくないとあかんとか言って、俺とB君に決まったやん。最初はB君が会長でもいいかなあと思ってたんやけど、ヘッドに決まったから、女の子になったんやと思う。」

と、A君は人数不足が女性会長誕生の要因ではないかと語る。そして、同じ質問にB君はこう答えている。

B君「会長は誰がいいか最初に意見出し合って、そんで、そっから話し合って、最後には手あげて決めたやんか。俺、実はあの時、(女性会長に賛成に)手あげてなかったんよ。やっぱり今までの会長も男やったし、賛成っていう風に手は上げられへんかったんよ。まあでも人数不足やったけえ、男がやることは無理やったんじゃけどね。」

このようにB君は女性会長には心から賛成という風には考えていなかったようである。

A君もB君も仕方がなく女性を選んだとまでは言わなくとも、女性を選びたくて選んだのではないようである。男性が人数不足のため、男性を選ばなかったというのである。

また、トップ2人が女性ということにどう感じたかという問いに対し、

A君「ほんまに正直言うと、そら一人ずつの方がよかったと思ってたよ。だってやっぱり考えも偏るやろうし、実際偏ってたと思うし。一人ずつならバランスもとれたんちゃうかなあ。んー、でも結局は人数が足らんかったし、しょうがなかったんやけど。」

と、語る。そしてなぜ男性を選ばなかったのかという問いに対し、

A君「何回も言うけどやっぱり人数が一番の理由かなあ。」

と、答えている。このように人数不足という要因もあってトップ2人が女性、そして女性会長が誕生したとA君とB君は答えた。彼らのインタビュー内容から考えると、この仮説が正しかったように思われる。しかし、人数が少なかったと答えた者が男性だけであったことが気にかかった。大きく関連しているのだとすれば、女性からも同じ意見が出て良いだろう。だが、女性からは男性の人数不足という要因は強調されることはなかった。

そこで本当に人数不足であったのかを調査してみよう。過去の名簿やOBの方々から、幹部交代の時期である2回生の10月の2回生の人数を調べ、グラフ化してみた。2000年から2007年までの2回生の人数を調べることが出来た。なお、我々が2回生だったのは2005年である。その結果が図1である。

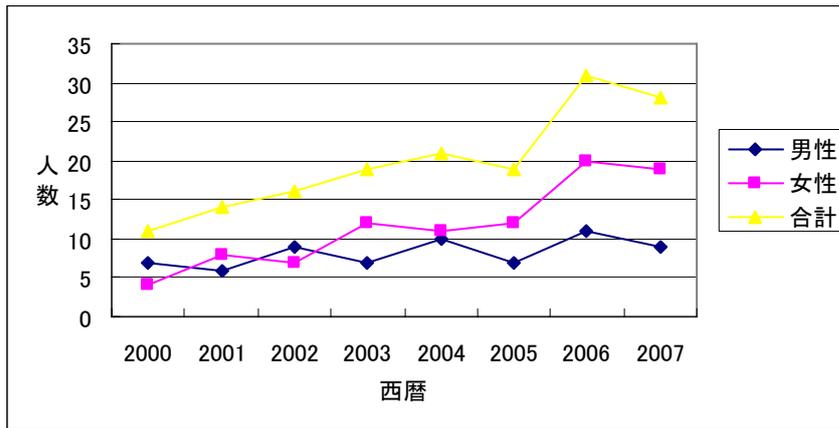


図 1 2000年から2007年の2回生の人数の推移

この図1を見ると全体的には2回生の人数は増加傾向にあることがよくわかるだろう。特に2006年、2007年は人数が多い。この2年間と我々が2回生であった2005年を比較すると人数は少ないように感じるかもしれない。しかし、本当に2005年は人数が少ないのであろうか。

実際はそうではない。2005年とそれ以前を比較してみよう。人数は少なくなく、2000年と比べると合計人数ではほぼ倍ほどになっていることがわかる。2006年、2007年と比較してしまい、人数が少ないように感じてしまっていたのではないだろうか。また、男性よりも女性の人数が多いため、男性の人数が少なく感じてしまったのかもしれない。実際は問題となっていた男性の人数も多くはないものの、少なすぎる訳ではない。以前と同じほどの男性の人数がいるのである。それにも関わらず、女性が会長となった。このことより女性会長が誕生した理由に、我々の学年の男性の人数が少なかったということとは関連していなかったのではないかという答えが導きだせるだろう。

(2) 男性の人柄

次に我々の代の男性の人柄について分析する。今までは男性であった会長が女性になったということは、我々と同回生の男性にも要因があるのではないかと考える。先輩方と同じような男性達ならば、男性が会長をしていたはずではないだろうか。そこでインタビュー結果から男性の人柄が関連しているかどうか検証してみたい。

なぜ会長に女性を選んだのか、また人数にもっと余裕があれば男性を選んだと思うか、

という質問に対しCさん、Eさん、Fさん、A君は次のように話した。

Cさん「女性から選んだっていうか、男の子の中でやれそうな人がおらんかってん。もちろん会長になってもらったOさんはしゃあなく選んだんじゃなくて、頼りになるし、会長をしてもらいたかったから選んだんやけど。なんか先輩らのみたいな男の人がおったら頼りたかったし、会長も男の人にやってもらったと思うねん。でもな、うちの代(の男性)には頼られへんかったやん。男性を選ばなかったんじゃなくて、選ばれへんかったって言うほうが正しい気がするなあ。ていうか、人数に余裕あってもやっぱ重要なんは人やん。だから、人数になんぼ余裕あっても頼りない男なら選ばれへんし。だからOさんよりもできる男がおったら選んだけど。」

Eさん「男の子が頼りなかってん。幹部になる前も女の子が仕切ってたし。んー、なんか男子には統率力がなかった気がする。人柄とかはみんな良いんやけど、時間にもルーズやし、頼りないし。この人が会長ではサークルが成り立たへんのじゃないかなって私は思ってたかな。まあ、B君なら会長は無理でも副会長は任せてもよかったかもしれへんけど、ヘッドコーチすることになったから選ばれへんしなあ。まあ副会長もB君よりPさんのほうがふさわしいと思ってたし、それで良かったんやけど。だからもし今のメンバーがどんだけいっぱいいても、会長には男子よりもOさんを選ぶよ。」

Fさん「男の子にやる気が感じられへんかった。たぶんうちの学年は女子のほうが多いし、男子は意見とか言いにくかったんやろうけど、あまりにも静かなんやもん。それに、正直、いざという時に頼れたんは男子よりもOさんやったし。だからそらどっち選ぶってなったら、あかん男より、できるOさんを選ぶやろ。んー、もうちょい男の子がしっかりしてくれてたら良かったんやけどなあ。なんで私たちの学年(の男性)だけあんなみんな優しすぎるというか、頼りないんやろな……。うちの学年だけ特別やん。人数に余裕があってもその人によるな。今のメンバーと一緒に選らばへん。任せられへんもん。でも頼りになる(男性)やったら選んだと思うよ。」

A君「やっぱり自分も含めてやけど、男が全員頼りなかつたから。申し訳ない……。人数がいっぱいいても人によるなあ。B君がいっぱいいたら会長に推したかもしれんけど、ん

一、でもB君も統率力はないから悩むとこやな。あっ、管理能力もないわ。あと他のメンバーがどんだけおってもやっぱりOさんがなってたと思う。もし俺がどんだけいっぱいおっても会長はやってないし。だって人前で話するのが苦手やもん。Oさんの方がむいてると思う。」

この4人の言葉には共通点がある。皆が口を揃えて「男性が頼りなかった」と答えているのだ。男性であるA君までそう答えている。具体的にはどう頼りなかったのであろうか。皆の意見からは時間にルーズ、意見を出さない、統率力がない、人前で話が出来ないなどの意見があげられている。実際、先輩方からもよく私達の学年は男性が弱すぎ、女性が男性を尻にひいている状態であると言われていた。

では我々の回生の男性は、他の回生の男性とどう違うのであろう。頼れる男性が他の学年より少ないのだろうか。他の学年との違いを調べるために、頼れる男性と頼れる女性の数を比較してみよう。頼れる、頼れないというのは明確に測れるものではない。だが、頼れる人は誰から見ても頼れると思われるだろうと考えた。そこで、それぞれの学年の信頼のおける人物に、その学年が幹部に就く2回生の頃の頼れる男性、頼れる女性の数を尋ねた。それをグラフにまとめたものが図2である。この図では頼れる男性は「できる男性」、頼れる女性を「できる女性」としている。また、我々が2回生であったのは2005年である。

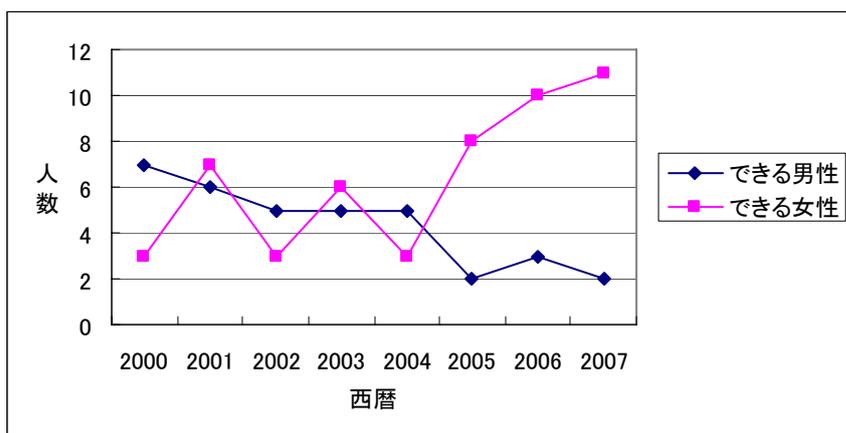


図 2 2000年から2007年のできる男性、できる女性の人数の推移

この図からわかることは2005年に急激にできる男性が減少しており、できる女性が

増加しているということである。やはり我々の学年は先輩方と比較すると、できる男性が少ないようである。しかし、このグラフをそのまま信用することは出来ない。図1を見て頂くとわかるように、それぞれの年によって人数が違うのだから、できる男性とできる女性の人数に差が出るのは当たり前なのである。今回注目しなくてはならないのは、各々の学年のできる男性とできる女性の割合である。そこで、できる男性はその学年の男性の中で何パーセントいるか、女性も同様にグラフにまとめた。それが図3である。

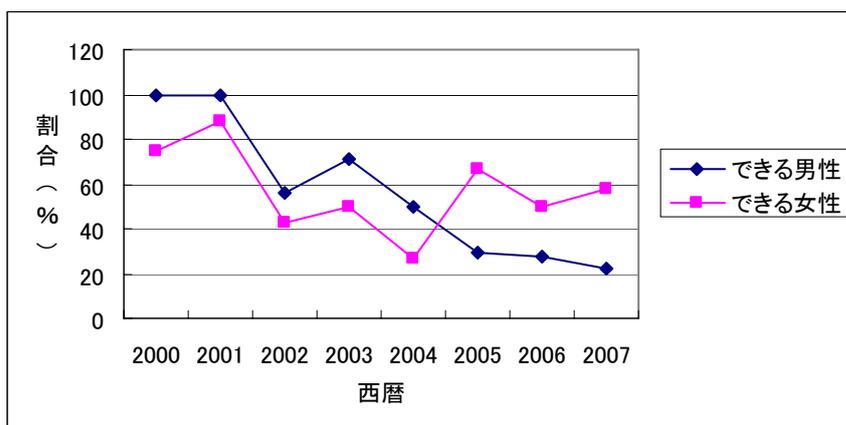


図3 2000年から2007年のできる男性、できる女性の割合の推移

図3からわかることは2つあるだろう。1つ目には、図1で2回生の人数は年々増加傾向であることがわかったが、できる2回生の割合は低下していることだ。昔は人数が少なかった分、皆が責任感を持ち、しっかりしていたのではないだろうか。だが、2回生の人数が増加するにつれて人任せになり、できる2回生が減少しているのではないだろうか。

2つ目はできる男性とできる女性を比較した結果だ。できる男性の割合は2003年を境とし、低下傾向にある。できる女性の割合にはばらつきがあり、増加しているとはいえないようだ。そして、一番注目すべき点は我々の代が幹部を務めた2005年に、できる男性とできる女性の割合が逆転してしまっていることだ。2004年まではできる男性の割合の方ができる女性の割合より高い。割合自体はその年によって違うのだが、男性の割合の方が高いということは変化していないのである。だが、2005年からできる男性の割合ができる女性の割合を下回ってしまったのだ。できる男性の割合が低下したことには、サークルに参加しない幽霊部員や、誰かがやってくれると考えている人任せな者などがいるなどさまざまな理由があるだろう。その理由ははっきりとはわからないが、できる

男性の割合が低下していることは事実などである。これは女性会長が誕生したことに大きく関連しているといえるのではないだろうか。

また、先ほどの4. 1の(1)の項で我々の代の男性が、会長に女性を選んだのには人数が少ないということが関連していると答えたと言ったが、人数が少ないのではない。正しくはできる男性、頼りになる男性の人数が少ないのである。

このように我々の学年には頼れる男性が少なかったようである。そしてそのような男性たちを会長には選ばなかったのだろう。そのことにより、会長を女性から選ばざるを得なかったようである。この分析の結果、男性の人柄は女性会長誕生に関連しているといえるだろう。

しかし、ここで疑問が生まれてくる。2006年も2007年もできる男性の割合は低く、できる女性の割合が高い。それにもかかわらず会長は男性が務めている。我々と同じような条件ならば女性が会長でもおかしくはないだろう。しかし、女性会長は続かなかった。この疑問は後ほど説明していこう。

(3) ジェンダーによる役割分担意識

次に女性会長誕生に関連があるだろうと考えたのは、「男はこうあるべきだ」「女はこうあるべきだ」というジェンダーによる役割分担意識である。この意識が根強く残っていれば、男性がトップに立つべきだという考えになるだろう。だが、女性会長が誕生したということは、現4回生はこの意識が低いものが多いのではないかと考えられる。そこでインタビューをもとに現4回生の性役割の意識を分析してみよう。

まずは、もしOさんと同じくらいの能力がある男性X君がいれば、Oさんとどちらを会長に選んだかという質問を皆にした。その答えは次のようなものであった。

A君「それやったらX君を選ばわ。だって(我々の回生の)女の子は問題を深く捉えすぎてまうし。別に代々男やったからとか、男のほうが適してるとかは思わへんねんけど。」

X君を選ぶという答えであったが、これは性役割による理由ではないように感じる。A君は実際に我々の回生の女性が問題を深く考えすぎてしまうことを前から懸念しており、そのことからX君を選んだようである。また、同じ質問にGさんは

Gさん「X君を会長。別に男やから上とかちゃうねん。ていうかまあ、やる気のあるほうにやらせたらいいんちゃう。Oさんは別に最初はやる気じゃなかったやろ。だからX君かな。」

と語る。GさんもA君と同様に性役割による理由ではなく、やる気の問題だと話している。この2人の意見を見ると、やはり役割分担意識が薄いのではないかと思う。だが、B君はこの2人とは違う意見をこう話す。

B君「そりゃX君やろ。やっぱできるなら男がやらなね。男やしやらなって気持ちはあったしなあ。まあ俺はヘッドコーチやったから、できへんかったけど。」

このB君の意見からは、本当は男性が会長をやるべきだという考えがわかるだろう。彼は「男性なのでやらなければならない」という考えを持っている。B君は男性がトップに立つべきという考えがいつの間にか染み付いてしまっているのではないだろうか。また、Cさん、Dさんはこう話している。

Cさん「それならX君選んだかも。んー、今までも会長は男やったし、できる人がおらんなら男選ぶやろなあ。なんやかんや言うて、見てて安心感あるやん、男の人の方が。」

Dさん「X君かな。なんか男の子は威厳あるし、一家の大黒柱っていうたらやっぱり男やん。なんかそんなイメージがあるんよなあ。」

この2人もB君と同様に会長は男性がやるべきものだと考えているようだ。理由も男性は安心感がある、威厳がある、一家の大黒柱は男性などというものだ。これは男女の役割分担意識が関連している意見ではないだろうか。そしてインタビューを行った他の6人も同じようなことを答えた。インタビューをした10人中8人がジェンダーによる役割分担意識が根強く残っているように感じる。いつの間に我々にはこのような意識を持つようになってしまったのだろう。

我々大学生が今まで所属していた社会というと、やはり小学校、中学校、高校などの学校という社会が代表的なものだ。この学校という社会の中で、我々は知らず知らずの間に

ジェンダーは染み付いているのではないだろうか。例えば名簿を考えてみよう。プリンスにも名簿が存在するのだが、この名簿はただ単純に五十音順に並べられているのではない。男性が先、そして女性はその後に載せられているのである。これはプリンスに限ったことではなく、今まで体験してきた学校生活の中でも同じようなことはあっただろう。私の小学校、中学校の名簿が男性を先に載せているものであった。だがそれに何も不満を感じなかったし、疑問も持たなかった。このような小さなことも我々のジェンダーの意識に影響を与えているものだろう。

また、性役割分担意識を持っているメンバーは、ジェンダーについてどのような考えを持っているのだろうか。そこで女性であるということを男性と比べてどう感じるかという質問を試みた。

Cさん「なんかレディースデイとかあって女の方がいいし、まだ不利なことも感じないよ。でもこれから社会に出たら不利そう。子供生んで会社休むんも女やし。でもどっかでそれは普通で、家事も自分がやるべきもんって思ったりするわあ。家事は手伝ってもらいたいって思ってるけど、そう思ってる時点でそういう気持ちがあるってことなんやろか。」

Cさんは女性であることに今のところ不利であるということも、不満もないようである。しかし、社会に出てからは会社勤めをするようになれば、まだまだ女性が不利なのではないかと語っている。また家事も女性である自分がすることだという意識を持っており、役割分担意識を持っていることがわかる。そして同じ質問に対してDさんは

Dさん「私は女に生まれてよかったよ。子ども生めるし、おしゃれとかもできるやん。でも決定権とかって何かと男の人が持ってない？いや、男の人っていうかお父さんっていうか。なんか私がなんかやりたいとかお母さんに相談しても、そっからお母さんがお父さんに言って、結局お父さんが決めるもん。でもめんどくさいねんけど、それをいちいち変には思わんし、しゃあないって思ってる自分がおるねんなあ。なんかそういう考えを植えつけられてる気する。」

と話す。Dさんは女性に生まれたことに満足している。だが、父親と母親を比較してみ

ると、決定権は父親が持っていると考えているようだ。何かを相談してみても決めるのは母親ではなく父親だと話すのである。どちらもの了承がいるというのなら話はわかるのだが、母親の了承はなくても父親の了承さえあれば良いそうだ。このように家庭内でもジェンダーは染み付いているようだ。しかし、CさんとDさんの共通点として、どちらも女性であることに不満は持っていないということである。この2人の話から考えると女性は家事をするのが当たり前で、決定権も母親は持っていないということになる。普通に考えるとそれは女性にとって良くないことのように感じないだろうか。それにも関わらず、女性で良かったと言えるということは、それらのことは女性には当然なことだと受け入れてしまっているのであろう。また、Oさんはこう語る。

Oさん「上に立つんは不利やな。女だけの社会で女を認めてくれる中でなら上に立つんも普通やねん。でも組織とか会社とかサークルとかの認めてくれへん中ではしんどいって。まあ悪いことだけじゃないし、男に生まれたかったとは思わへんけど。でもやっぱさ、会社とかの制度もさあ、昔よりは制度とかも良くなったとは思うけど、まだまだ対等には働けへんやん。働く上で、子どもあずけるとこも少ないし。ていうか就活の時にめっちゃ不利やって思わなかった？なんか、結婚して旦那さんが転勤になったらどうするんやとか聞かれたし。そんなん答えられへんし、ずるいやん。」

会長であったOさんは女性が上の立場に就くのは不利だと語る。彼女は会長という役職を経験し、こう考えるようになったようである。また、会社の中でも女性は不利になると考えていると話してくれた。男女雇用機会均等法が1985年に成立した今日でも、このように不満を持っている者はいるのである。男女が平等になったといわれている今日でも、まだ女性が男性と同じように働いたり、同じように長を務めたりすることは困難なことのようである。

このようにジェンダーによる役割分担意識はほとんどの者に根強く残っているようである。学校や家庭などさまざまな場所でジェンダーを感じさせられている我々は、容易にはこの意識を捨てることはできないのだろう。女性を会長に選び出した我々の回生は、役割分担意識が低いのではないかと考えていた仮説は間違っていたようで、女性会長誕生にはこの意識は関連がないようである。

(4) 会長自身の人柄

女性会長が誕生した背景にはさまざまな要因が存在するだろうが、その中でも会長自身の要因というのは大きなものではないかと考える。会長自身が代々男性であったことに抵抗を感じていれば、女性会長は誕生していないのではないだろうか。また、その女性が会長としてふさわしい人格でなければ選ばれていないだろう。そこでここでは会長へのインタビューから、女性会長が誕生した要因を分析しよう。

初めから会長になりなかったかという問いに対し、

○さん「初めはやる気はなかったん。意識仕出したんは先輩に『次の会長は○さんがやらなあかんと思うで』って言われてからやと思う。ほんまにやらなあかんのかなあって思ってる時に幹部の話し合いが始まってん。」

と答えている。このように会長は初めの頃はやる気は全くなかったようである。だが先輩の言葉がきっかけとなり、会長に就くことを意識仕出したようである。また、会長になろうと決心したのは何故かという問いに対し、

○さん「やっぱりみんなに指名されたからかな。みんなからの指名がなかったらやっつけないもん。私がやりたいって言ってやれるものじゃないし、みんなの納得が必要やん。まゝ先輩に（会長は○さんがやらなあかん）言われてから、やりたい気持ちも少しはあったけどね。」

と話す。○さんは皆の指名があったからこそ会長になることに踏み切れたようである。それが無ければ○さんは会長になっていなかったかもしれない。次に自らが会長を務めることにどう感じたかという問いに対し、

○さん「先輩らの『女性会長は新しいなあ』っていう言葉にプレッシャー感じたし、なんか申し訳ない気もしたわ。しかも前の会長がテニスも出来たから、テニスのプレイだけでも引っ張っていけそうに見えてん。でも私は（テニスの）プレイで引っ張る力はないし、会長には認めてもらえへんのじゃないかなって思ってたよ。だから自分が一番に動こうっ

で思っせん。サークルにもなるべく参加できるように時間割もサークルに合わせて組んだし。あとは会長やし、他の幹部の仕事もサークルのことも全部把握しときたかったかな。」

と話す。この言葉よりOさんの責任感の強さがうかがえるだろう。会長になるからには皆に認められるように努力し、また幹部の仕事も把握しておきたいという姿勢にはサークルのトップとしての意識の高さを感じられる。そして、もし人数に余裕があれば男性に会長をしてもらいたかったかという質問に対し、

Oさん「そりゃもちろんしてもらいたかった。やっぱり女でも問題はないけど、会長は男の子がやったほうがいいと思うもん。男の子は指示されるにしても、男からの指示されたほうがやろうと思うやろうし。なんかあった時に男が注意したほうが効き目あるんやって、やってみてわかったもん。でも同じメンバーの男子なら、やってもらいたいけど…、A君らに任すぐらいなら自分が動いたと思う。もしB君が会長になっても、私は同じぐらい仕事したと思うもん。んー、いちいち心配するぐらいなら自分でやるって感じやわ。もし先輩らみたいな男の人がおったらやってないやろけど。」

と答える。Oさんは、会長は出来るだけ男性が務めたほうが良いと考えているようだ。それにも関わらずOさんが会長を務めたのは、Oさんの行動力も要因ではないだろうか。誰かに任せて心配するぐらいなら、自分がやると言い切れるのは大した行動力の持ち主だろう。また次に、会長に初めて女性が就くということにどう感じたかという問いに対し、

Oさん「女やからってことには最初は不安は少なかったよ。だって副会長も女やったし、言いたいこと言いやすいし、孤独感もなかったもん。まあ、もともと（私達の代は）女が強かったしな。代々（会長を）男がやってたってことには抵抗はなかったよ。プレッシャーはあったけど。なんか代々とかは気にならんかってんな。関係ないやん。女が上に立つことにも私は抵抗ないし。だって私、女子高出身やし、女が上に立つことも、女がよう動くこともそれが普通やったから。バイトもずっと女だけのとこでやってるから、店長さんももちろん女やし。なんか女社会におることが多いんかもしれん。」

と話す。やはり彼女は代々男性が務めてきたということにはなんの抵抗も感じていない

ようである。これは女性会長誕生の大きな要因だろう。では何故、抵抗がなかったのだろうか。これは、この後の高校時代の話で明らかとなった。

○さん「高校ん時は弓道部に入ってた、そこでも部長しててんか。この時も自分からやるっていうわけじゃなくて推薦されて、投票で決まってる。この時は先生との関係が難しかったり、いろいろほんま大変やったんよ。でも、まあいい経験やったけどな。たぶんここでの経験で大学でも（会長に就くことに）抵抗はなかったんちゃうかな。なんか高校時代も部長やし、そのままの勢いって言うか……。うん。」

このように○さんは女子高出身であることがわかった。このことが、代々男性が務めてきたという流れを止めることに抵抗がなかった大きな要因といえるだろう。実際、○さんはずっと共学で育った私のような者にはなかった考えを持っているように感じる。私自身の経験では小学校、中学校、高校などの生徒会長などのトップの役職は全て男性が務めていた。部活動でも部長は男性が務めていたのである。共学であればトップは全て男性というのは間違いであろうが、男性の確立が高いとはいえるだろう。そのためトップは男性というのが常識になっている人も多いのではないだろうか。

だが○さんは女子高出身のため、その考えは持っていない。○さんも話していたように女子高には当然女性しかいないのだから、女性がトップに立つことになるのである。しかもその中でも○さんは高校の弓道部で部長を務めていた。実際にトップを務めており、他にももちろん女性のトップを多く見てきただろう。そのため女性が会長になるということにも抵抗が少なかったのではないかと考える。この女子高という女性社会で育った○さんだからこそ、初の女性会長に抵抗なくなれたのではないだろうか。

このように女性会長が誕生した要因には○さん自身の性格や考え方が大きく関連しているように考えられる。○さんが会長に就く決心をしたのは先輩方や同回生の仲間の後押しがあっただけで、○さんの責任感の強さ、「私がやらなければ」という行動力などが皆に後押しさせる要因となったのであろう。また、○さんが女子高出身、アルバイトでも女性しかいないという女性だけの社会を経験していることにより、初の女性会長にも抵抗なく就けたのではないかと考えられる。女性だけの社会を経験していない者では、抵抗なしというわけにはいかなかっただろう。そのため、女性会長が誕生した背景には周りの環境だ

けでなく、やはりOさん自身の性格、育ってきた環境が大きく関連しているようである。

4.2 なぜ女性会長は続かなかったのか

次に、なぜ女性会長が続かなかったのかを分析しよう。2005年に初の女性会長が誕生したのであるが、その後2006年、2007年共に会長は男性が務めることとなった。ではなぜ女性会長は途切れてしまったのであろうか。先ほど出てきた図3を見れば、2006年、2007年も「できる男性」より「できる女性」の割合が多いことがわかる。それならば女性が会長を務めていてもおかしくないだろう。しかし、実際は男性が会長を務め、2007年に至っては副会長まで男性である。

この項ではなぜ女性会長が続くことなく、また男性に戻ったのかを分析しよう。このことも現4回生へのインタビューから分析することとする。

実際に会長を女性が務め、どう感じたかという問いに対し、

Eさん「ほんま大変やったやろなあって思う。なんかなんでかわからんけど会長としての威厳がほとんどなかったように見えたし。後輩にもさあ、『女のくせに（生意気やし可愛げない）』みたいなことも実際言われたやん。こっちはやることやってんのと言われたやん。やっぱ男尊女卑とまではいかんけどさあ、そういう考え方の人もおるし、大変やったと思うわ。あ、あと（我々の代の）男がみんなの前とかでほんま何も言わなかったやんか。だから余計に女が集団で好き勝手に決めてると思われてたんちゃうん。」

と語る。ここでEさんが後輩に言われたことに注目して頂きたい。「女のくせに…」という言葉が出てきたが、これは我々の代が幹部を務めている時、実際に下の回生の男性のから言われたのである。これは女性であった会長、副会長に向けられた言葉であった。会長、副会長が何か至らない部分があり、苦情を寄せられるなら理解も出来よう。だが、これは「女性」だと言う部分に言いがかりを付けられているように感じる。そもそも「可愛げがない」とはどういうことなのだ。女性は男性の言うことを聞き、後ろでおとなしくしていれば可愛げがあるのだろうか。このようなことを言われるようであれば、やはり女性の地位はまだ低いのではないかと考えられる。

また、Eさんは会長としての威厳がなかったと話している。これはあることがそう思わせていると考える。そのこととは挨拶である。サークルのメンバーと学校などで出会うと

挨拶を交わすのが自然であろう。上下関係の厳しい組織では、目下のものが目上のものに挨拶をするのは当然である。上下関係が厳しくなくとも、挨拶をするのは常識的なことではなことで、特に会長というサークルのトップに挨拶をしないということは不自然なことのように思われる。だが、ある一部の後輩はこの会長に挨拶をしなかったのである。Oさんが会長になるまではこのようなことはなく、普通に挨拶を交わし、会話もしていた。だがOさんが会長になってから、彼らは学校などで出会っても挨拶もしなくなり、会話も必要最低限になってしまった。会長としてのOさんを認めていなかったからこのようなことが起こったのではないだろうか。後輩に挨拶されない会長は威厳がないと言えるだろう。このように後輩に認められぬまま会長を務めるというのは容易なことではないだろう。またCさんもこう語っている。

Cさん「しんどい思いさせたと思うよ。うちのだけの中はいいねん。でも外からの目がいややった。外からの誤解にほんま『なんで?』って思ったもん。女子が頑張ってるのに、男子がのけもんになってるみたいに見られたやん。それが悔しくて仕方なかった。なんか一個上の代を後輩は見てたから（会長、副会長は）男、女っていうのが普通やと感じてたんかなあ。だから、私らがでしゃばってるように見えたんって感じやし。裏でちゃんとやってるとかは見てくれんと、前に出たところばっか見てでしゃばってるとか言われたやんかあ。ちゃんと私らを見てよって思ったわ。」

このCさんの話に出てくる外からの誤解とは、女性がでしゃばっているように思われたことである。Cさんは後輩達からきちんとした評価を受けることが出来なかったと語っている。女性会長を中心とした我々幹部は今までと同じように幹部としての仕事をこなしてきた。それなのに男性があまり意見を出さなかったため、女性ばかりで好きなように振る舞っているように後輩達に言われたのである。

2005年以前の男性会長の時の幹部は、私が見ている限りでは女性の幹部メンバーが意見などを言っている姿は見るのがなく、おとなしい印象を受けていた。だが、だからといって男性がでしゃばっているようには見えなかったし、女性がのけ者にされているようにも見えなかった。それぞれが得意とする仕事をしているのだという印象だった。しかし、なぜこれが女性に変わるとそのように見られてしまうのであろうか。やはりこれには男性は男性らしく、女性は女性らしくという意識が根強く残っているからだろう。いくら

ジェンダーフリーだと言われている今日でも、今までに植えつけられた意識はそう消えないようである。また、Dさんも同じ質問にこう答えている。

Dさん「結果的にはうちのベストを尽くせし、良かったよ。でも最後まで後輩は認めてくれなかったけど。んー、今まで（会長、副会長が）男、女やったのに、（私達は）女、女やったから（後輩は）違和感とか感じたのかなあ。そら全部が完璧やったとは言わんけど、会長も副会長も女の分、めっちゃいろんなことに気まわしたし、いろんなことの気遣いやったら今までの幹部よりもあったはずやし。やのに、イメージで決められた気するわ。うちらでも苦労したんやから、会長はもっと苦労したと思うわあ。」

このようにDさんもCさんと同じようなことを語っている。やはり会長、副会長共に女性ということに対しての後輩のイメージは良くなかったと感じているようである。仕事はこなしているのに、イメージにより女性会長は認められなかったことに不満を持っているようだ。性別による固定的な決めつけによる偏見、いわゆるジェンダー・バイアスにより、後輩達は女性会長を認められなかったのではないだろうか。また、会長であったOさんは、

Oさん「女やし、見下されてるんちゃうかってのはちょっと思ってたそれは絶対いややってん。だから、嫌われてもいいから（副会長の）Pさんと言にくいことでも言っていたかなあかんって決めてたし。まあ、怒ったり、いろいろ注意したりな。でもあかんねん。なんぼ女が怒ったりしても言うことかへんかったもん。なんでなんって思うぐらい（後輩に）なめられてたからなあ。あんな、今までの人生は女に生まれてよかったって思えててん。でも会長やって、こんなに男に生まれたかったことはないな。女じゃできひんもん。今まではな、女が頼りないっていうイメージなんかなかってん。会長やるまでそんなこと考えもせんかったし。でもほんまサークルで女が不利なん知らされてわ。」

と話す。ここで「こんなに男に生まれたかったことはない」という言葉が出てきた。この言葉は女性会長が如何に大変で困難なことかを表しているだろう。女性であることが男性に劣っている訳はないのであるが、この時だけは男性に生まれたかったと語っている。これは女性であるというだけで、トップに立つということに不利なことが生じたということだろう。実際私も副会長を務めており、会長を支える立場にいたため、女性会長の大変

さを間近で見えてきた。例えば総会などでOさんが前に出て話をしても明らかに聞いていないもの達がいた。その時、彼女が話を聞くように注意をしても彼らはその注意を聞かないことが多々あった。他にもサークルのテニスの練習中に彼女が後輩を注意することがあったが、彼らはそれを無視した。同じことを男性の先輩が言うと彼らはその注意を素直に聞くのである。また、集合の際など彼女が集まるように声をかけても彼らはなかなか行動に移してくれないのである。このようにどんなに女性が注意などをしても、特に男性の後輩はなかなか聞いてくれないのである。これは無意識に女性よりも男性である自分自身を優位に見てしまっているからではないだろうか。また、Oさんはこう話を続ける。

Oさん「なんかプリンス自体が『男が引っ張っていくべき』っていう考え方を求めてる気がする。んー、男を立てて女はそれを支えるっていうか。先輩らも目立つんは男の人ばかりで、女の人はおとなしかったやん。うちの代だけ女が目立ってるけど。だって（後輩の）女の子も『男たてた方がいいんじゃない？』っていう考え持ってたと思うし。だって一個下の女の子が二個下の子らに『女は会長やらんほうがいい』って言うたって聞いたやん。そんなん女の会長は認められてないってことやし。会長やったんは楽しかったし、いい経験やったとは思いますが、絶対もうやりたくないわ。女が認められてないねんからな。」

ここでプリンスという組織自体が、男性を立てるべきと考えているのではないかという意見が出た。これは先輩であった女性からも同じようなことを聞いたことがある。しかし、これは本当にプリンスに限ったことなのであろうか。先ほど述べたように学校、家庭などの様々な社会で、我々は無意識に男性を立ててしまっているように感じる。また、女子マネージャーという存在も男性を立てている代表ではないだろうか。マネージャーは男性である場合もあるだろうが、ほとんどが女性である。そして男性がプレイをし、女性はそれを裏で支える。これは戦後の家庭のようである。男性が働き、女性は主婦として家族を支える。環境は違うものの、形は同じであろう。このように我々は女性が男性を支えるということが無意識のうちに常識となってしまうのではないだろうか。プリンスがこのような考えを持っているというよりは、社会がこのような考えから解放されていないと考えるほうが自然ではないだろうか。

また女性の後輩が、女性は会長をすべきでないと語った理由は何であったのだろうか。それは我々の回生の女性会長を見ていたからではないだろうか。皆に認められていない姿

を見ていれば当然そう考えるだろう。そして女性自身、サークルのトップとなる会長は男性がすべきという性役割分担意識を持っているということも理由の1つであろう。このように女性会長が続かなかつた要因としては、我々の満足いくとは言えない幹部活動を見ていたということと、男性も女性も「男性はこうあるべき、女性はこうあるべき」という考えから解放されていないということがあげられるのではないかと考える。

では一体どのように振る舞えば、女性会長は受け入れられるのかを考えよう。そこで女性会長を体験したOさんにもう一度会長をやり直せるとしたらどうするかと問うと、

Oさん「もうほんまやりたくないねんけどなあ。でもほんまにやらなあかんとしたらとりあえず泣いたりせんと思う。面と向かって男性の後輩に文句言われたときに私は泣いてしもたやん。あんなんとか女の弱さが出てたと思うし、そんなんが余計後輩は頼りなく見えたかもなあ。」

Oさん「あとは、そうやなあ、私はいつも自分が動いてたやん。何するにしても私がやらなつて。あつ、ボール拾いとか後輩がやるようなこともな。その時は私が先頭に立ってなんでもやらな、なんでもわかつとかなつて思ってたんやけど、今考えると会長はもっと『ドン!』と構えとくべきやったんかなあとも思う。社長とかつてさ、自分が動くっていうかうまく部下を使うのが大事やん。でも私は自分が動き回つてたからトップっぽくなつたんかな。まあ私の性格上動かんとかとドンと構えんのは出来へんけど。」

Oさん「あとはなあ、(一部の)後輩が私と話せんくなつたときに、私ももういいわつて思つて話さんかつたけど、あれがよくなかつた気がする。私からももっと歩み寄るべきやったわ。もう一回やるとしたら、もっともつと後輩と色々な話して、何考えてんのか聞きたいや。」

と語る。Oさんはもしももう一度会長をやり直せるならば3つのことを改善したいと考えているようだ。

1つ目は泣くという行為である。Oさんが話していた通り、彼女は後輩の前で泣いてしまったことがあつた。後輩に対する意見に涙を見せてしまつては、後輩は弱い会長と感じてしまうかもしれない。頻繁に涙を見せていたわけではないが、泣いてしまうと女性は弱

いものと思ってしまう、尊敬できなくなってしまうのかもしれない。

2つ目は会長としての態度だ。皆の上に立つものはどっしり構えているというイメージがあるが、Oさんはそうではなかった。私が見ていても彼女はいつも先頭に立ち、どんな雑用もこなしていた。もちろんそれが間違っていることではないだろう。だが、そのようなやり方で認められなかったため、彼女は次回があればトップに立つものらしく、どっしり構えたいと語った。そのような態度の方が皆は強い会長で、頼れるというイメージを持ちやすいと考えたのではないだろうか。

3つ目は後輩との関係である。一部の後輩がOさんとの会話などを拒絶し始めた時、彼女はそれに疑問を感じつつも、その拒絶を受け入れ、Oさんからもあまり会話をしなくなった。その態度が良くなかったのであろう。拒絶されてもOさんから話しかけることで、後輩の態度は変わっていたかもしれない。Oさんから歩み寄る努力をしなかったのも認められなかった要因なのかもしれない。

Oさんの意見から考えると皆は会長には頼れる強さを求めているように感じる。Oさんは気遣いが出来、たくさんの仕事を懸命にこなしていたが、頼れる強さというものはあまりなかったように考えられる。性役割分担意識が根強く残っている今日、女性がトップに立つには精神的な「強さ」が必要なのではないだろうか。

ここで一つの疑問が生まれた。前述の通り、Oさんは女子高時代も部活動で部長を務めていた。この時には、うまくリーダーシップを取れたのだろうか。Oさんに尋ねると、

Oさん「高校の時は結構うまくいった気がする。みんなまとまってたし、私もやりやすかったよ。そら揉めたりとかももちろんあったけど、ちゃんと話し合っ解決できてたしな。」

と話す。女子高時代はうまくリーダーシップを取り、部長として皆のトップに立っていたようである。では何故、大学のこのサークル活動ではうまくいかなかったのでしょうか。その問いにOさんは、

Oさん「人数も多かったし、男の子いたからかな。なんか高校の時は女子だけやったしやりやすかったけど、男子がいたら女やからって思われたらいややって変に頑張りすぎた気がする。あと、高校の時は泣いたりせんかってん。なんか大学では頑張ってるのに、

(男性から) 文句言われたりしたから、やっぱ女やからやって悔しくて泣いてしもたんやと思うわ。」

と語る。Oさん自身、男性がいる中で自らが会長に就くことに不安を抱えていたようである。女子高出身ということで女性がトップに立つことに抵抗がないと話していたOさんだが、やはり不安は持っていたようだ。不安を抱えていたため、弱さをあらわにしてしまったのではないだろうか。自信を持って取り組むことも会長としての精神的な強さに繋がるのではないかと考える。

また、副会長であったPさんにももう一度副会長をするならばどうするかということを探ねてみると、

Pさん「もっと後輩と話し合えばよかったかなって思う。会長が文句言われた時、私はその場におらんかったからその後はなんもなかったようにその後輩に接したけど、私にも不満あったやろし話聞くべきやった気する。なんかいやそうな顔とかされた時はあったし、無視された時もあったけど、やることやってんのにそういう態度取られたのが悔しくて、私はいやならそれでいいみたいな態度とってたもん。なんか変に媚びるのはいややし、女やからってなめられたくないし、強い態度でおらなって意地はってた気する。だから次はもっと後輩と話し合って理解しようと思う。」

と語る。Pさんは幹部活動の中で涙を見せることはなかった。弱さを見せるどころか、強くいなくてはと考えていたようだ。Pさんは後輩たちの態度にひるむことなく、対抗するような態度を取っていたように感じた。「女性だから弱さを見せてはいけない、強くいなくては」という思いからそのような態度を取っていたのであろう。だが、その態度で後輩達と対立してしまっただけでは認めてもらえる可能性も低下するのではないだろうか。そのためPさんは何を言われてもきちんと話し合い、後輩のことを理解すべきだったと考えているようである。

この2人のインタビューから考えると、女性がトップに立つには精神的な強さが必要であると考えられるだろう。この強さというのは男らしくなるということではない。強くいるために男らしくなるという考えを持つこと自体、その人の中に女性は弱いという意識を持っている証である。男性らしく振る舞うのでは本当の強さを手に入れたとはいえないだ

ろう。女性のまま強さを身に付けなければ女性はトップとして認められることはないのではないかと考える。

5. まとめ

今回、サークル初の女性会長が誕生した要因と、女性会長が続かなかった要因を調査し、次のような結果となった。

女性会長が誕生したことに関連があるのではないかと考えた男性の人数不足、ジェンダーによる役割分担意識は関連がなく、我々の回生の男性の人柄、会長となった女性の人柄が関連しているという結果となった。そして本当にただの偶然かもしれないが、できる男性が少なかった我々の代に、会長という役職に女性が就くことに抵抗のない女性がいた。この偶然が女性会長を生み出したのだ。会長を務めたOさんが女子高出身でなければ、女性会長は誕生しなかったかもしれない。頼れる男性がたくさんいても、女性会長は誕生していなかったかもしれない。このような2つの要因が揃わなければ、女性会長は誕生しなかっただろう。

このように、女性会長が誕生した要因はほんの小さなものであった。だが、女性会長が誕生するのは本当に珍しいことで、簡単に女性会長が誕生しないということが明白となったのではないだろうか。今日、男性と女性は平等になった、ジェンダーフリーだと言われている。しかし我々は学校、家庭、会社等の至る場所で知らず知らずのうちに性役割分担意識を身に付けている。この意識を持ってしまっていることにさえ気づいていない者もたくさんいるのではないだろうか。そのため女性がトップに立つこと、今回の場合は女性が会長に就くことがまだまだ受け入れられなかったのではないかと感じる。だから女性会長は続かなかったのであろう。そしてこれからも組織の中でジェンダー・バイアスが存在している限り、女性がトップに立つことは容易なことではないだろう。

6. 考察

サークルで幹部をしている時、女性会長が受け入れられないことが悔しくてならなかった。今までと同じようにしているのになぜ後輩達は受け入れてくれないのだという気持ちを常に持っていた気がする。だが本稿で女性会長のことを分析し、受け入れられなかったのは仕方がなかったのかもしれないと考えるようになった。無意識にジェンダー・バイアスを持ってしまっている人が多い今日、簡単に受け入れられるほうが難しいのかもしれない

い。もちろんそれで良い訳ではないし、このままではいつまでたってもジェンダーフリーにはならない。だが、女性会長が誕生していなければ、サークルという身近な社会に性役割分担意識が根強く残っていることにさえ私自身も気付きもしなかったであろう。

本稿を通してこのことに気づけたのだから、サークル、そして社会をジェンダーフリーに近づける努力をしていきたいと考える。一度染み付いた考えはなかなか変わるものではないかもしれないが、各々の意識を少しずつ変えていくことが必要なのであろう。これからは女性でも堂々と会長になれるよう社会、そして「男らしく、女らしく」ではなく、「自分らしく」いられる社会を望む。

最後になってしまったが、本稿を書くにあたり、インタビューに答えてくれた同回生、指導して下さった先生に心からの感謝の気持ちを伝えたい。

〔参考文献〕

落合恵美子，2004，『21世紀家族へ〔第3版〕』，株式会社有斐閣

朝日新聞社，2002，『ジェンダーがわかる。』，朝日新聞社

亀田温子、館かおる，2000，『学校をジェンダー・フリーに』，株式会社明石書店

北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”，2004，

『ジェンダー白書2ー女性と労働』，株式会社明石書店

遙洋子，2001，『働く女は敵ばかり』，朝日新聞社

40字×30行 本文29ページ 原稿用紙63枚（24，832字）